



おとぎ話の残影

すずき ようこ
鈴木 庸子

ナポリオリエンターレ大学政治学部・講師

昔々ある所に、世界中の珊瑚が集まる、竜宮城のような町がありました。その町民は皆働き者で、町に溢れる珊瑚で幸せに暮らしました。これはほんの40年程前、南イタリアに実存した話である。その夢を生きた当時の女の子に、記憶の一端を聞かせてもらった。

おとぎ話の前に、彼女が携わっていた珊瑚加工業の大半を占めたネックレス用の粒の、当時の加工過程を整理すると、洗浄した珊瑚を選別し、各特質を生かす形に切る（カッティング）。珊瑚片を色・サイズ別に分け、糸を通す穴を開ける（穿孔）。研削盤で丸みをつける（モデリング）。軽石と袋に詰め、水を加えつつ12時間手でもみ（研磨）、水洗い。色・質・サイズ別に分け、相を整え一連分毎にネックレス状に並べる（連組み）。商品種毎に規定の長さの糸に通し（糸通し）、規定の本数にまとめて完成、となる。

では、夢のような本当のお話のはじまり、はじまり・・・

ナポリの近くに、トッレ・デル・グレコという町があります。海に面したこの町は、15世紀半ばから、命知らずの珊瑚漁師の町として地中海中で知られていました。19世紀初頭のこと、マルセイユ珊瑚加工工場長だったフランス人が、この海の

赤い黄金をさらに美しく高価なものとする魔法（加工）をこの町にもたらしました。この時トッレ・デル・グレコは、漁・加工・流通の経済サイクルを確立し、世界の珊瑚の町となりました。

時は流れて、1963年。15歳のアンジェラちゃんは、中学校を飛び出して、同じマンションに住む仕立ての上手な友達の家で、その技を習いに行くことにしました。ところが、その家で友達の姉妹やお母さんが切っては削っていた真っ赤な珊瑚の魔法にかかり、すぐに針と糸を捨ててしまいます。この友達の家で、ごつごつした珊瑚を丸くする魔法（モデリング）を覚えた彼女は、これに必要な道具を買い揃え、自宅でこの魔法の練習に励みます。

2年程経ったある日、美しい珊瑚をたくさん持つと評判の工場に呼ばれたアンジェラちゃんは、そちらに行ってみることにしました。工場の扉を開けた瞬間、美しい色調が無限に広がる光景に心を奪われた彼女は、珊瑚を美しくする魔法を極めることを誓います。この工場の後、やはり神秘的な珊瑚を山ほど持った工場もう2軒で、月曜から土曜まで、しばしば1日10時間も珊瑚に埋もれて修業を続けた彼女が糸通し係をしていたある日、珊瑚の全てを見通せる目が宿ったのです。その日から彼女は、その特別な目を持つ人しかできない役（連組み）を得、また同僚に珊瑚の秘密を教え



てあげる、特別な存在になりました。

そんなある日、アンジェラちゃんのお母さんが病気になりました。大変残念でしたが、彼女は珊瑚との10年に終止符を打つことにしました。珊瑚の魔法が解けたのでしょうか？いいえ、そんなことはありません。間もなく彼女は、珊瑚の魔法にかかった家の男の子と結婚し、可愛い子供も2人授かり、末永く幸せに暮らしました。めでたし、めでたし。

こんなおとぎ話をトッレ・デル・グレコ中が生きたのは、アンジェラさんによると1960~75年頃だと言う。珊瑚漁師や水夫は、陸に上がればにわか珊瑚職人となり、ブルジョア階級も副業として珊瑚に携わっていた。当時の原料の豊富さと業界の勢いは、最近は独特の形が好まれ、ネックレス等に用いられている珊瑚の細い枝先が、粒に加工するには手間がかかりすぎ、小さすぎて商品価値が低いとされ、廃棄されたという贅沢な逸話からも伺える。また彼女を珊瑚と引き合わせた姑は、娘達も手伝ったにせよ、自宅での珊瑚加工による収入だけでマンションを購入した。モデリングに従事していた頃は当時の国内平均月収の約1/5だったアンジェラさんの収入も、連組み担当時はその半分にまで近づいている。

この町中が沸いた珊瑚景気はしかし、あっけなく終焉を迎える。1979年にサルデーニャ島近海での珊瑚漁が禁止され、原料が不足し値段が高騰すると、資本力が弱い中小規模工房・商社が姿を消す。副業として携わっていた人々は手を引き、珊瑚漁師は商船や客船の水夫となった。加工に関してはさらに、研磨等の職種が機械に代わられた。また糸通し等、機械化は難しいが仕事量の減少とともに工場からポストが消え、定年退職した職人やその家族が家内下請の形で現在も行っているが、専門職としての輪郭はぼやけた職種もある。

人口約9万人の町に400軒もの関係会社がひしめくトッレ・デル・グレコが、現在でも珊瑚とカメオ産業の世界的中心地であることは揺るぎない事実だが、10年間おとぎ話を生き、ハッピーエンドで乗り切ったアンジェラさんには別次元の話である。彼女の現在の珊瑚業界に対する見解は、彼女の子供達が珊瑚と無関係の道を選んだことから察せよう。

今日もトッレ・デル・グレコで土を深く掘り返すと、当時の「ごみ」である珊瑚の枝先がごっそり出て来ることがある。ローマ期の詩人オヴィディウスがメデューサの血から生まれたとし、その魔力を称えた珊瑚と、5世紀以上も深く付き合ってきた業は、簡単には消えそうもない。